早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　29号―2　二〇二一年三月

# 大沼枕山『歴代詠史百律』の位相

陳　霊　侠

## はじめに

大沼枕山（一八一八～九一）、名は厚、字は子寿、枕山はその号である。江戸後期から明治前半にかけ、江戸（東京）詩壇を代表した漢詩人の一人である。

幕末維新の激動期において、日本の漢詩壇では詠史詩が盛行し、詠史専門の詩集が数多く刊行された。枕山もこのような流行の中で明治十六年（一八八三）に『日本詠史百律』、明治十八年に『歴代詠史百律』という二種の詠史詩集を上梓している。このうち、『歴代詠史百律』（以下『歴代』と略称）は、中国史を対象とする詠史詩集であり、当時主流であった日本史を対象とする詠史詩集とは類を異にしている。しかも、この当時の詠史詩集のほとんどが七言絶句を用いているのに対し、枕山の詠史詩集二種はすべて七言律詩である点も異彩を放っている。

近年、石川忠久氏を囲む研究会（紫陽会）の諸氏により、『歴代』の解題、諸本と校異、訳注、ならびに関連の論文七篇等を収めた『大沼枕山『歴代詠史百律』の研究』（汲古書院、二〇二〇年二月。以下、『研究』と略称）が公刊された。『歴代』の具体的相貌と作者大沼枕山の人と文学が初めて専著の形で紹介された意義はもちろん小さくない。また、『歴代』の、詠史詩集としての性格ないしは特質についても、同書所収の詹満江、高芝麻子、大村和人三氏の論文によって基本的な指摘はすでになされている（後述）。ただし、私見では、その多くが基礎的な事実もしくは傾向の指摘に止まり、なお検討の余地を多く残しているように思われる。より具体的に言うならば、まず中国において形づくられた詠史詩集の伝統もしくは系譜との通時的比較、そして日本の同時代において盛んに製作された詠史詩集との共時的比較の両面において、なお遺漏と不足が認められる。

本稿は、枕山の二種の詠史詩集のうち、中国詩歌史に直接関連する詠史詩集という理由から、とくに『歴代』に焦点を当て、通時・共時の比較をより徹底した上で、詠史詩集としての位相を今一度明らかに

する。その上で『歴代』の独自性、ひいては枕山の詩歌観に分析を加えることを目的とするものである。

なお、本稿における『歴代』本文の引用は、すべて前掲『研究』所掲の国立公文書館所蔵本影印資料に拠る。

## 一、中国における詠史詩の伝統と詠史詩専集の系譜

詠史詩の源流が中国にあることは論を俟たない。むろん枕山自身も中国詠史詩の影響を大小さまざまに受けつつ、自らの詠史詩を創作していたに相違ない。そこで、まず始めに本家正宗の詠史詩の伝統と系譜について確認しておきたい。

詠史詩は歴史上の人物もしくは事件を主題とした詩であり、その起源は、明の胡応麟が「詠史の名は孟堅より起こる（詠史之名、起自孟堅）」（『詩藪』外編二）と指摘したように、『漢書』の編者、後漢・班固（三二～九四、字孟堅）にある。下って魏晋南北朝時期になると作例も漸増し、南朝梁に成立した『文選』では、「詠史」の項目が立てられ（巻二十一）、王粲、曹植、左思……等々計九名二一首の作例が収められている。なかでも、西晋の左思が「詠史詩」八首、南朝宋の顔延之が「五君詠」五首というように、それぞれ連作組詩の形式による詠史詩を製作したことが後世に与えた影響はけっして小さくない。

唐代に入ると、題材としての詠史は一気に普遍化し、李白・杜甫を始め主要詩人の多くが作例をのこすようになった。とりわけ、晩唐の詩人たちが積極的に製作し、詠史詩はここに新たなる展開を迎える。晩唐の代表詩人、杜牧や李商隠は近体の詠史詩を数多く作り、とくに七言絶句・七言律詩による作例が晩唐を境に急増した。杜牧ならば「題烏江亭」「赤壁」「過華清宮絶句」（七絶）、李商隠ならば「隋宮」「南朝」（七律）、「北斉二首」「馬嵬二首」（七絶）等の作品がある。

枕山『歴代』との関連でより注目すべきは、晩唐から五代にかけ単独の詠史詩集が陸続と編集されたことである。胡曾の『詠史詩』三巻一五〇首、汪遵の『詠史詩』一巻五八首、周曇の『詠史詩』八巻一九五首、孫元晏の『詠史詩』一巻七五首がそれである。そして、これらは何れももっぱら七絶の作のみを収める。

北宋に入ると、欧陽脩、王安石、蘇軾、張耒等々、代表的詩人たちが好んで詠史詩、とりわけ杜牧の「題烏江亭」に代表されるような翻案の詠史詩を数多く作っているが、必ずしも七絶ばかりではなく、古体・近体の別を問わずに多様な詩型を用いている。

ところが南宋に入ると、北宋期に鳴りを潜めた大規模な連作組詩が再び多作されるようになった。前期の王十朋「詠史詩」一一〇首、後期の劉克荘「雑詠一百首」二巻二〇〇首、宋末元初の陳普「詠史」二巻五六五首がその代表である。また、宋末元初の徐鈞『史詠集』二巻一五三〇首（現存二九七首）、鄭思肖『一百二十図詩集』一二〇首等の専集も編まれ、晩唐と同様の現象が現れている。しかも、南宋から元初の詠史組詩は、ほとんどが七絶（劉克荘の作例は五絶）であり、あたかも晩唐期の「詠史詩＝七絶」という伝統に再び回帰した観がある。

つづく元明清三代のうち、とりわけ明清における詠史詩の製作状況は多様化と多産化の一途を辿ったといって過言ではない。元代では、古楽府体による詠史詩集、楊維楨の『鉄崖詠史』八巻が名高い。明代では、その楊維楨の試みを継承した李東陽の『擬古楽府』百余首を始めとして、黄淳耀『詠史楽府』、胡纘宗『擬西涯古楽府』が作られ、その他、晩唐・胡曾の『詠史詩』を模した詩集も五種編まれている。

今日の中国詠史詩集研究における最も網羅的かつ詳細な成果、張煥玲、趙望秦著『古代詠史集叙録稿』[1]によれば、明代の詠史詩集は一一五種を数える、という。そして、清代になると、その数倍の七三〇種にまで膨れ上がった。形式・内容ともに多様化し、汪元慎（?～?、道光十七年〔一八三七〕挙人）の『詠史集』八巻のように、集句による大規模な七律詠史専集も現れた。もっとも特筆すべきは羅惇衍（一八一四～七四）の『集義軒詠史詩鈔』で、六十巻からなり、七律一六五九首を収める。先秦から明末に至る人物を対象とし、一個人の七律詠史の専集としては空前絶後の規模を誇る詩集といってよい。

以上を総括すると、唐宋の詠史詩集において用いられた詩型は七言絶句が圧倒的に多かったのに対し、元明清のそれは多様化した一方で、清代後期になると七言律詩多用の傾向も認められる。

ただし、元以降の詠史詩集がどれ程日本に舶来され、どのような具体的な影響を及ぼしたのかについては、明・李東陽の『擬古楽府』と頼山陽の『日本楽府』の影響関係を除くと、なおも不明の部分が多い。とはいえ、後述するように、幕末維新期の詠史詩集がほぼ七絶を用いるという厳然たる事実を重んじるならば、かつて山岸徳平氏が指摘したように、「我が国の詠史の詩も殆どすべてが、胡曾の詠史詩を範として居た」[2]と見なすのが穏当なようである。よって、元明清の各種詠史詩集との影響関係については別の機会に精査することとし、本稿ではひとまず唐宋までを『歴代』の比較対象として考察を進めることとする。そしてこの限りでは、七律をもっぱら用いた枕山の二種の詠史専集は詩型レベルにおいて、唐宋期の詠史詩集と比べても、また同時代の日本のそれと比べても、異色な存在として位置づけられるのである。

## 二、『歴代』の概況と幕末維新期の詠史詩集

本節では、『歴代』及び幕末維新期に刊行された詠史詩集の概況を整理し、『歴代』を取り巻く共時的な状況を見ておきたい。

詠史の組詩は詩題によって、A. 歴史事件の発生した場所＝地名、B. 歴史事件の名称、C. 人名、の三類が存在し、枕山『歴代』はC類に属する。『歴代』に採られた歴史人物は、前漢・張良から、宋末元初の鄭思肖に至るまでの計百二名に、附録の前漢・劉向一名を加えて、総計一〇三名に上り、各人一首ずつ、すべて七律を用いて詠じられている。詹満江氏は、『研究』「底本解題」において、この一〇三名を分野別に「文芸」「政治」「軍事」「思想」「能書」「僧侶」「道士」「隠者」「歴史」「宮女」の十類に分けた上で、「文芸」に属する人物が三六名

に達し最も多い、と指摘している。筆者はこの点こそが枕山『歴代』の最も顕著な特徴と考えるが、結論を急ぐ前に、同時代日本の詠史詩集のなかにあって、この特徴がはたして特異なのか否かについて、まず検証を試みたい。

揖斐高氏の指摘[3]によれば、幕末維新期の日本における詠史詩流行の一大契機となったのが頼山陽の『日本楽府』である、という。よって、頼山陽の詩集を調査の起点とし、枕山『歴代』までに出版された詠史詩集を調査したところ、以下のように、少なくとも計三一種の詩集が刊行されていたことを確認できた[4]。

① 頼山陽『日本楽府』　天保元（一八三〇）日本史〔楽府〕
② 小林畏堂（至静）『畏堂詠史百絶』　天保三（一八三二）日本史〔七絶〕（天保九・十四年版本あり）
③ 東夢亭『詠史百絶』　嘉永二（一八四九）日本史〔七絶〕
④ 影田蘭山『百将新詠』　嘉永四（一八五一）上巻日本史〔七絶〕下巻中国史〔七律〕
⑤ 荒井堯民『本朝人物百詠』　安政二（一八五五）日本史〔七絶〕
⑥ 守田通敏編『詠史絶句』　万延元（一八六〇）日本史・中国史〔七絶〕
⑦ 羽倉簡堂（用九）『詠史』　文久二（一八六二）中国史〔五絶〕
⑧ 阿部省『皇朝詠史』　文久二（一八六二）日本史〔七絶〕
⑨ 大槻磐渓『国史百詠』　慶応元（一八六五）日本史〔七絶〕
⑩ 青山延寿『読史雑詠』　慶応二（一八六六）日本史〔五古〕
⑪ 中島子玉『日本詠史新楽府』　明治二（一八六九）日本史〔楽府〕
⑫ 村上仏山『仏山堂詠史絶句鈔』　明治三（一八七〇）日本史・中国史〔七絶〕
⑬ 石川省斎編『皇朝詠史鈔』初編　明治三（一八七〇）日本史〔詩型混在〕
⑭ 植村蘆洲編『詠史百絶』　明治四（一八七一）中国史〔七絶〕
⑮ 金本相観（摩斎）『皇史摘詠』　明治四（一八七一）日本史〔七絶〕
⑯ 大槻磐渓『国詩史略』　明治四（一八七一）日本史〔七絶〕
⑰ 一万田子逸（一万田希）『読史雑詠』　明治五（一八七二）日本史・中国史〔詩型混在〕
⑱ 市野迷庵『詩史纂』　明治八（一八七五）日本史〔七絶〕
⑲ 河口寛『海外詠史百絶』　明治十（一八七七）欧米史〔七絶〕
⑳ 谷合南涯『日本英雄百絶』　明治十（一八七七）日本史〔七絶〕
㉑ 大塚尚編『皇朝詠史』　明治十一（一八七八）日本史〔詩型混在〕
㉒ 竹内東仙『皇朝詠史百絶』　明治十一（一八七八）日本史〔七絶〕
㉓ 角田錦江『詠史絶句』　明治十三（一八八〇）上巻日本史〔七絶〕下巻中国史〔七絶〕
㉔ 岡本行敏編『外史雑詠』　明治十三（一八八〇）日本史〔詩型混在〕
㉕ 西川文仲『日本外史楽府』　明治十三（一八八〇）日本史〔楽府〕
㉖ 小菅揆一『前哲百詠』　明治十四（一八八一）日本史〔七絶〕
㉗ 大沼枕山『日本詠史百律』　明治十六（一八八三）日本史〔七律〕
㉘ 中村正郷『詠史百律』　明治十七（一八八四）日本史〔七律〕

㉙ 股野達軒『達軒詠古詩鈔』 明治十七（一八八四）日本史・中国史〔上巻七絶、下巻七律〕

㉚ 中村正郷『詠史百絶』 明治十七（一八八四）日本史〔七絶〕

㉛ 大沼枕山『歴代詠史百律』 明治十八（一八八五）中国史〔七律〕

幕末維新期の詠史詩集がほぼ七絶によって占められていることは、高芝麻子氏の「幕末明治期における詠史百首流行と『歴代詠史百律』」（前掲『研究』所収）にすでに指摘があるが、右の一覧によってもそれを確認できる。その理由は、晩唐の杜牧・李商隠の詠史詩、さらには胡曾の『詠史詩』のもつ規範力がこの時期の日本においてもなお絶大であったことを示唆している。また、日本史を対象とした詠史詩が圧倒的多数を占める中、少数ながら中国史を対象とする詩集も含まれている点は、枕山『歴代』の位相を考察する上で重要な意味をもつ。改めてそれを列挙すると、④影田蘭山『百将新詠』（下巻）、⑥守田通敏編『詠史絶句』、⑦羽倉簡堂『詠史』、⑫村上仏山『仏山堂詠史絶句鈔』、⑭植村蘆洲編『詠史百絶』、⑰一万田子逸『読史雑詠』、㉓角田錦江『詠史絶句』（下巻）、㉙股野達軒『達軒詠古詩鈔』の八種である。

まず、⑥守田通敏『詠史絶句』と⑭植村蘆洲『詠史百絶』の二種はアンソロジーで、⑥は日本漢詩人四五人の手になる作品を選録しており、中国の歴史人物を詠じた詩は百首余収められている。⑭は枕山の門弟植村蘆洲が中国詩人の手になる詠史絶句を百首選録したものであり、枕山が序文を寄せている。

一詩人の手になる詩集には、⑫村上仏山『仏山堂詠史絶句鈔』、⑰一万田子逸『読史雑詠』、㉙股野達軒『達軒詠古詩鈔』の三種がある。⑫には、抗清の英雄鄭成功を詠じた組詩九首が含まれる。⑰は日中の史書を読み感じたことを詠じた詩集で、「読貞観政要有感遂賦十絶」や「読晋恵帝紀」（附録）等、中国の史書を読んで詠じた詩が含まれている。㉙は上下二巻からなり、上巻は日中両国の人物七五人を七絶で詠じ、中国の人物三九人を詠じた題画詠史組詩が収められている。下巻は七律の作を収め、懐古と読史からなり、「読諸葛武侯伝」、「読李忠定公奏議」二首が収められている。

高芝氏は、この時期の中国史を対象とする「詠史百首」の詩集は㉓角田錦江『詠史絶句』（下巻）と㉛大沼枕山『歴代詠史百律』しかないと記しているが、筆者の調査によれば、それ以外にも④影田蘭山『百将新詠』（下巻）が存在する。上下二巻からなり、上巻は素戔嗚尊から豊臣秀吉まで、日本の人物百一名を七絶によって詠じた詩が収められ、下巻は殷末周初の斉太公（姜尚）から明の常遇春まで、中国の人物百三名を七律によって詠った詩が収められている。さらに、⑦羽倉簡堂『詠史』は、厳密な意味では「詠史百首」の枠組みを超えるとはいえ、管夷吾から鄭成功まで、中国の人物一二三人を詠じた五絶一三七首が収められており、枕山と同時代の中国史詠の詩集として無視できない存在であろう。

以上のように、幕末維新期に、中国史に材を取り百首以上収録した詠史詩集は、高芝氏の指摘した㉓と㉛以外にも、少なくとも④影田蘭山『百将新詠』（下巻）と⑦羽倉簡堂『詠史』の二種が現存しており、

高芝氏の遺漏を補うことができる。

また、七言律詩をもっぱら用いた詠史詩集についても、枕山の二種以外に存在していることが確認できた。④影田蘭山『百将新詠』（下巻）と㉘中村正郷『詠史百律』の二種がそれである。

## 三、『歴代』と他の詠史詩集との比較

筆者は前節において、枕山の『歴代』に「文芸」の人が最も多く選ばれた点こそ『歴代』を性格づける最も顕著な特徴だと述べたが、本節では、この点を検証する。

まず、胡曾の『詠史詩』は地名を詩題とするため、前掲詹氏が行ったような身分や職種等による分類は困難であり、正確な数字を示すことができないが、帝王や政治家、軍事家が全体の強半を占める。唐・周曇の『詠史詩』では、計一六七名のうち、帝王が最も多く六〇名、政治五三名、軍事一〇名の順で続き、この三類で全体の74％を占める。南宋・王十朋「詠史詩」では、計一〇六名のうち、帝王が八三名、政治・軍事人物が二〇名で、この二類で97％を占めている。

『文選』の注家であり所謂五臣の一人、唐の呂向は詠史詩を「史書を覧（み）、其の行事の得失を詠じ、或ひは自ら情を焉（これ）に寄す（覧史書、詠其行事得失、或自寄情焉）」と概括している。実際に歴代の詠史詩が対象とするのは、国の命運を分けた戦や政治的判断が圧倒的に多く、人物でいうならば、そのような局面において主役級の役割を演じた者たちの占める割合が大きい。したがって、右の唐宋詠史詩三種が示唆するように、帝王や賢相・良将が自ずと高比率を占めることになる。史書には「隠逸」「文芸・文苑」等の伝も含まれるので、歴史的大事件とはそもそも関わりの薄い、それらの人物が唐宋の詠史詩集において採り上げられることも絶無ではないが、「帝王将相」類に属する人物と比べれば、総じてその比重は明らかに軽い。

さて、幕末維新期の詠史詩集三種の状況はどうであろうか。

まず、④影田蘭山『百将新詠』（下巻）は集名に明らかなように、武将を中心に百名の軍事関連の人物を詠うものである。なかには、唐の太宗や宋の太祖等の帝王も詠われ、唐の魏徴や宋璟等の名相も採り上げられているが、いずれにせよほぼ全てが「帝王将相」の範囲の中に収まる。

⑦羽倉簡堂の『詠史』では、帝王が最も多く三八名、次いで政治関連の二九名、次いで軍事関連の二七名となり、この三類で全体の74％を占める。ちなみに文芸関連は八名[5]で、約7％を占める。

㉓角田錦江の『詠史絶句』では、政治関連が最も多く三二名、次いで帝王諸侯の二七名、次いで軍事関連の一九名となり、この三類で78％を占める。文芸関連は八名[6]、全体の8％を占める。

右の三集を見る限り、題材にされた人物は「帝王将相」の比率が圧倒的に高く、唐宋の詠史詩集と同様の傾向を示している。ただし、文芸関連の人物が題材化された例も、「帝王将相」の比ではないとはいえ、一定の比重を有しており、唐宋の詠史詩集と比べると相対的に高い傾向を示している。これは、おそらく中国人と日本人の持つ中国歴

史の関連知識の量の相違が主たる要因ではないかと推察される。つまり、日本の読者にとっての中国歴史人物の関連知識は中国人のそれより相対的に少ないため、知名度という点から文芸系人物の優先順位が高まった結果なのではないか、と推察されるのである。

しかしどうであれ、枕山の『歴代』における文芸系人物の比率が全体の35％を占めるという事実は、同時代の日本においても突出して多い。未だ正確なデータを筆者はもたないが、元明清の代表的な詠史詩集を瞥見した限りでは、元明清を含めても、まったく類を見ない特徴と断言してもよいように思う。

中国の詠史詩集にも見られず、かつまた日本の同時代にも類例を見ないということになれば、大沼枕山その人の個性にこそ、この突出した特徴の主因を求めるべきであろう。

## 四、江湖詩社の薫陶を受けた大沼枕山の詩歌観

大沼枕山が漢詩人として頭角を露わしたのは、江戸後期から幕末にかけての時期である。この時期は、漢詩人の裾野が一気に拡がり、江戸漢詩が最盛期を迎えた時期といってよい。作者人口の拡大を促した立役者は、寛政から文化・文政にかけ新しい旋風を巻き起こした江湖詩社の面々で、枕山は詩社同人の一人、菊池五山に師事して詩芸を研いた。江湖詩社の創始者である市河寛斎の作詩心得を、詩社同人の一人、大窪詩仏が『詩聖堂詩話』(7)に以下のように伝えている。

寛斎先生嘗て詩を論じて云く、「詩は風情に本づくに、之を風趣に求めずして、之を格調に求むれば、抑遠きかな。且つ格は猶ほ人品のごとく、品は上下に分かつ。士農工商、各おの身分有り、品格有り。臣にして君と為り、農にして士と為るは、之を分を知らずと謂ふ。故に応制・試帖は、吾為らざる所なり、何となれば則ち身 江湖に在ればなり。従軍・塞下は、吾作らざる所なり、何となれば則ち時際 昇平なればなり。夫れ教へは修身より始りて之を天下に充つ、詩を学ぶも亦た爾り。其の身分の中を言ひ、所として能くせざるは無くして、然る後 応制・従軍 遇する所に従へば、皆な吾が身分の外に出でず。故に詩を学ぶに、一に之を目前に求めて、必ずしも之を遠きに求めず」と。先生の此の言、痛く今人の病ひに中たる。故に此に録す。

寛齋先生嘗論詩云、詩本風情、不求之風趣、而求之格調、抑遠矣哉。且格猶人品、品分上下。士農工商、各有身分、有品格。臣而爲君、農而爲士、謂之不知分。故應制・試帖、吾所不爲、何則身在江湖也。從軍・塞下、吾所不作、何則時際昇平也。夫教自脩身始而充之天下、學詩亦爾。言其身分之中、無所不能、然後應制從軍從所遇、而皆不出於吾身分之外。故學詩、一求之目前、不必求之遠。先生此言、痛中今人之病。故錄于此。

市河寛斎の主旨は、蘐園学派の擬古主義批判にあり、彼らが好んで詠じた「応制」「従軍」「塞下」等の題材は、「身 江湖に在」る者にとってはそもそも縁遠くリアリティーに乏しいものなので、彼らを真似るべきではないことを説く。そして、詩を学ぶ者は身分相応の題材を選

び、つとめて身近なことを詩に詠じるべし、と戒めている。大上段に天下国家を論じたり、あけすけに政治批判を展開したりする詩は、分不相応として真っ先に排除されたはずである。実際に江湖詩社同人の作品は花鳥風月を中心に、酒宴や田園、閑居を題材とすることが多く、それを近体の七絶、五律、七律の三詩型を中心に詠じるという顕著な傾向をもっている。

彼らの活動が引き金となって、江戸のみならず、各地で詩会が催され、「宿題」として右と同傾向の詩題が示され、一定期間にそれを競作することが初学者の鍛錬の場となった。その応用編として実際に郊野の名勝に遊んだり、花柳街の料亭で酒杯を傾けたりしながら、漢詩を創作することが、江戸の風流の一つと化したのである。江戸の前期からすでにこの傾向は萌していたとはいえ、――詩会を定期的に開催して非士族の民間人を多数招き入れ、近体三詩型からなる作詩の階梯を具体的に定め、内容的にも政治は御法度の基本線を明確に示し、手本として南宋三大家を始め中国詩人の選集や類書を多数刊行し、さらには書画会を催して大いに気焔を上げた――江湖詩社同人の果たした役割は極めて大きい。

大沼枕山は江湖詩社の同人亡き後、彼らの路線を継承して、幕末詩壇において不動の名声を獲得した詩人である。つまり、江戸の風流を体現した人物、それが枕山なのであった。

維新という全く新しい体制の設立により、文芸を取り巻く思潮も大きく様変わりした。西欧起源のジャーナリズムとマス・メディアが日本にもたらされたことによって、江戸後期以来、確実に日本の知識層の自己表現手段となった漢詩にも最大の転機が訪れたのである。四民平等の理念の下、明治の知識人は俄に中国の伝統士大夫同様の発言権をもつようになり、詩のなかで天下国家を論じ国政を批判することも十分可能となったのであった。そして、詠史詩は本来それを表現するのに恰好のジャンルでもあった。古を批評しつつも、その実、今を諷喩するというのが、詠史詩の隠れた伝統の一つでもあったからである。

しかし、枕山はその可能性に背を向け、江戸の風流の中に留まりつづけることを自ら選択したようである。枕山晩年の門弟、河合次郎は「枕山先生逸事」[8]を著し、次のような枕山の言葉を記録している。

先生終生時世を蔵否せず。曰く詩人は世外の徒なり、邦家の経倫別に其人あり。世外の徒能く及ぶ所ならんや、と。

この言は前引、市河寛斎の訓戒と完全に軌を一にしている。枕山の詩集『枕山詩鈔』を繙くと、詩酒の宴に招かれての作、花鳥風月を詠う作が圧倒的多数を占める。内田賢治編『大沼枕山逸事集成』（大平書屋、二〇一四年）には、天保の改革を諷刺したとされる「天保新楽府」や時世批判を込めた「地震行」等の集外詩が輯佚されてはいるが、[9]『枕山詩鈔』に収録されなかったところを見ると、右の枕山の詩歌観とは相容れないものとして割愛されたのであろう。彼が時世批判の作を詠じた事実それ自体は否定できないが、枕山平生の主たる詩業がまとめられた『枕山詩鈔』は、およそその対極にあるかの如き風雅風流

の世界によって埋め尽くされている。

よって、枕山の『歴代』における「文芸」や「隠者」の多さは、彼個人の志向と価値観をストレートに反映した結果と見なされる。そしてそれは同時に江戸後期以来の漢詩壇が共有した志向と価値観でもあった。それを象徴するのが、彼の選んだ一〇三名の中に、范成大、楊万里、陸游の南宋三大家がしっかり含まれている事実である。この三者は江湖詩社がもっとも尊崇し祖述した詩人であった。彼ら三大家が活躍した南宋中期は、半壁の偏安時代ではあったが、大きな戦乱もなく総じて泰平の世であった。よって、「帝王将相」でもない彼らが詠史の題材として選ばれる可能性はそもそも高くはない。その彼らが揃いも揃って全員採り上げられている事実に、枕山の価値観が江湖詩社以来の江戸漢詩壇の価値観に留まっている点がくっきり現れ出ている。

## 五、『歴代』における枕山の独特な視点

本稿の最後に、『歴代』の作品を一、二採り上げ、これまで述べたことを実例に即してもう少し細やかに見てみたい。

唐宋を始めとする伝統的な詠史詩集では、採り上げた歴史人物に対して、詩経毛伝以来の「美刺」の伝統を基盤として、毀誉褒貶いずれかの批評を盛り込むことが多い。ところが、『歴代』に相前後する日本の詠史詩集においては、総じて「美」の姿勢は顕著でも、「刺」の姿勢に乏しい、という共通点がある。とりわけ、枕山の『歴代』と影田蘭山の『百将新詠』はその傾向が強く、一人としてマイナスイメージの人物が採られていない。そのゆえにか批判や諷刺を一切加えず、いずれも肯定的に各人物が詠じられている。総体としての叙述傾向は以上の通りであるが、個々の着想や具体的な描写には、むろん枕山の特徴が現れ出ているので、同一の詩題をもつ他の詠史詩と比較しながら、それを検討してゆくこととする。

まず、「文芸」関連の中から、中唐の張志和を詠じた詩を比較する。

Ⅰa　張志和（徐鈞『史詠集』下巻）

細雨斜風一釣絲　細雨　斜風　一釣糸
綠蓑青笠鎭相隨　緑蓑　青笠　鎮（つね）に相ひ随ふ
朝廷休覓漁歌看　朝廷　漁歌を覓（もと）め看んとするを休（や）めよ
萬頃千波總是詩　万頃　千波　総べて是れ詩なり

b　張志和（大沼枕山『歴代詠史百律』）

船居宜夏興如何　船居　夏に宜し　興は如何
況有前山翠滴簑　況んや　前山　翠　簑に滴る有るをや
脫俗技能兼鼓笛　脱俗の技能　鼓笛を兼ね
全家事業寄烟波　全家の事業　煙波に寄す
高風眞趣蹤偏遠　高風　真趣　蹤（あと）　偏へに遠く
樵婢漁童意自和　樵婢　漁童　意　自ら和す
二十四言成創體　二十四言　創体を成し
新詞絶妙不須多　新詞　絶妙にして　多きを須ゐず

aの前半二句は、自ら「煙波釣徒」と称した張志和の日常を、彼の

代表作「漁父歌」五首、其一（『全唐詩』巻三百八）の中で使用された詩語（細雨、斜風、緑蓑、青笠）を引用して再構成したものである。転句は『新唐書』（巻一九六「隠逸」）の伝に見える、「嘗て「漁歌」を撰し、憲宗　真を図して其の歌を求むるも、致す能はず」、という憲宗が彼の肖像画を作り、彼の漁父歌を求めたものの果たせなかった故事を踏まえる。朝廷への批判をわずかに忍ばせながら、隠者の本分を全うする張志和を賛美する内容となっている。

b詩は、まず首聯において「浮家泛宅」（『新唐書』張志和伝）の暮らし故の素晴らしさを強調し、頷聯においては靄が立ち込めた水面である「烟波」、転じて江湖に全てを托す脱俗的生涯を詠いつつ、あわせて『新唐書』の伝にいう「善く山水を図し、酒酣（たけなわ）にして、或ひは鼓を撃ち笛を吹き、筆を舐むれば輒ち成る」という洒脱な文人としての一面をも盛り込んでいる。頸聯では前半四句の内容を「高風眞趣」の四字で総括し、第六句は『新唐書』の伝に記載する「帝　嘗て奴婢各一を賜り、志和　配して夫婦と為し、漁童、樵青と号す」、という皇帝が彼に下賜した奴婢を夫婦にさせ、「漁童」と「樵青」と名づけた逸話を踏まえ、「樵青」を「樵婢」に置き換えて作り出したものである。

尾聯に、枕山ならではの表現が配されている。「二十四言」の指すところは未詳。張志和が残した詩は「漁父歌」五首のみであり、その形式は何れも七言を基調とし、第三句の部分に三字句二句を挿入するもので、総字数は二十七字であるので、実際は「二十四言」より三字多い。しかし、何れにせよ、三字句二句を挟むこの形式は、張志和「漁父歌」によって大いに広められた形式に相違なく、「創體」（新しく創り上げられた詩詞の体裁や格律のこと）と呼ぶに相応しい。また、末句の「新詞絶妙」も、「漁父歌」の修辞に対する最高の賛辞である。其一の「青箬笠、緑蓑衣。斜風細雨不須歸」を始め、「清新」なる表現（「新詞」）で脱俗の境地を詠じた、張志和の詩風への率直な共感が吐露されている。ここには、「清新」を標榜した江湖詩社の流れをくむ詩人として、あるいはまた脱俗瀟洒の境地を追求する江戸の風流詩人として、詩人張志和に向き合い積極的に評価する姿勢がはっきりと出ており、詩人枕山の面目躍如といってよい尾聯となっている。

つづいて、どの詠史詩集においても必ずといってよいほど採り上げられる人物の一人、諸葛亮を詠じた詩を比較してみたい。

Ⅱa　諸葛亮（影田蘭山『百将新詠』下巻）

誰探龍窟駭閒眠　誰か龍窟を探りて　閑眠を駭（おどろ）かす
四海動搖山欲顚　四海　動揺して　山　顚（たふ）れんと欲す
烈火偏燒大江艇　烈火　偏（ひと）へに焼く　大江の艇
寸謀巧掃五原烟　寸謀　巧みに掃（はら）ふ　五原の煙
託孤不負君恩渥　孤を託されては　君恩の渥（あつ）きに負かず
臨義何論世運遷　義に臨みては　何ぞ世運の遷るを論ぜん
更著赤忠書一卷　更に著す　赤忠の書一卷
鴻名赫奕欲凌天　鴻名　赫奕（かくえき）として　天を凌がんと欲す

b　諸葛孔明（大沼枕山『歴代詠史百律』）

龍臥龍興豈有差　龍 臥し 龍 興る　豈に差有らんや
隆中太静蜀都譁　隆中 太だ静かにして 蜀都 譁し
欲将八陣答三顧　八陣を将て三顧に答へんと欲し
要以四隅成一家　四隅を以て一家と成さんことを要む
金甲不装儼結束　金甲 儼たる結束を装はず
桑田只辨冷生涯　桑田 只だ冷なる生涯を弁ず
出師表亦比梁父　出師の表も亦た梁父に比す
徹底至誠何復加　徹底たる至誠 何をか復た加へん

この一組は同一詩型の作である。aの詩は、前半の四句で諸葛亮の一生を三顧、出廬、赤壁、五丈原と時系列に沿って詠じ、後半四句で彼の内面、とくに「出師表」に記された忠義の心ばえを称賛する。よくまとまってはいるが、彼の生涯や忠誠心を主軸とする詠じ方は、杜甫の「蜀相」（『杜工部集』巻一）に代表されるように、諸葛亮を詠じる常道といってよく、したがってa詩もきわめてオーソドックスな詠いぶりと見なされる。

a詩が首聯で「臥龍」が眠りから起こされたことで、驚天動地の激変が発生したと詠じたのに対し、枕山のb詩では、それを真っ向から否定するかのように、眠っていようが覚めていようが龍は龍であり、そこに何ら区別はないと詠い出す。枕山が描いた諸葛孔明は、――隠士として隆中に隠棲した時期と、劉備に招かれ軍師参謀として急速に求心力を強め、ついには蜀の丞相として位人臣を極める激動の時期とで、少しも変わることのない一貫した姿勢を保ち続けた――「徹底至誠」の人であった。激動の時代の中でそのうねりに翻弄された孔明を描くのではなく、境遇に左右されない彼の不変的本質をあえて凝視し、そこに焦点を当てた独特な描き方をしている。管見の限りでは、日中両国の詠史詩のなかで、枕山と同様の視点から諸葛亮を詠じた作例は、㉓角田錦江『詠史絶句』（下巻）所収「諸葛亮」詩の末尾二句の「薄田　桑樹　成都の産、改めず　南陽の旧老農」を唯一の例外として、他には見出せなかった。

さらに一歩踏み込んで、出仕の前と後とで、孔明の何れに枕山がより強く感情移入しているのかを考えてみると、その答えは第七句に如実に表れているように思う。後世千古の名文と賛えられる「出師表」と、無名時代に好んで吟じていた「梁父吟」とを同等の価値と見なしており、これは逆の見方をすれば、出廬前の孔明をそれだけ価値ある存在と見なしていた証左である。このいささかバランスを欠く偏愛ぶりがいったい何処から来るのかといえば、それは結局のところ枕山個人の価値観に帰着するであろう。枕山に「只だ名と利とを言はざるが為に、終朝惹（ひ）くを免（まぬか）る俗人の猜（ねた）み」（「山房茗飲得灰」『枕山詩鈔』三編・巻中）や「福は清閑に在りて官に在らず」（「新歳雑題」『枕山詩鈔』三編・巻下）等の句があるように、世俗の名利に背を向け、脱俗的清閑なる境地を第一と考える枕山の価値観がそのまま投影されたのが、この独特な諸葛亮詩なのではないか、と推察される。

以上、わずか二例を比較検討しただけではあるが、『歴代』のなかで枕山は彼独自の視点と価値観によって、他の詠史詩には多見できな

い個性を発揮している、といってよい。

## おわりに

本稿では、大沼枕山の『歴代』と、中国唐宋時代の詠史詩集との通時的比較、ならびに日本の幕末維新期における詠史詩集との共時的比較を通じて、その特徴を洗い出し、『歴代』の詠史詩集としての位相を明確にした。

論旨は繰り返さないが、本稿の結びとして、改めて『歴代』の特異性を指摘しておきたい。中国のみならず、日本にあっても、詠史詩において主として採り上げられたのは、有り体に言えば、歴史を動かした人物である。その結果、自ずと「帝王将相」等、国の命運を大きく左右する地位に在った人々が主たる対象となった。この点は詠史詩が発展してゆく過程で不可避的に内包することとなった、原理原則とでもいうべき伝統である。よって、枕山といえどもそれを完全に無視するわけにはいかず、他の詠史詩集と重なる人選をしてはいる。しかし、詹氏の分類に従えば、「文芸」類が第一位で三六名選ばれ、「政治」類二二名、「軍事」類一九名より遥かに多いという事実は、詠史詩集の常道を大きく逸脱していると見なさざるを得ない。

『歴代』には、「文芸」の三六名に加えて、「能書」五名、「僧侶」三名、「道士」三名、「隠者」四名も選ばれており、本来、詠史の対象として親和性の決して高くはない人物が計五一名も選ばれ、親和性のより高い「政治」「軍事」類の総和を軽く凌駕しているのである。

「中国名人詠」の詩集ならば、あるいは『歴代』のような選択も十分可能であろう。しかし、『歴代』は詠史の詩集であることを標榜する書であるから、読者の中には看板に偽りありと批判する者がいたとしても決して不思議はないレベルの人物選択である。

そして、本稿の分析によれば、この選択は、枕山が心ゆかしく思い続ける江戸の風雅や風流と分かちがたく結びついており、江湖詩社以来の江戸漢詩壇の価値観をストレートに体現するものと考えられる。なにゆえ、七絶ではなく七律であったのかという詩型選択の問題についても、枕山が詩壇の花形となった江戸後期～幕末期の詩学認識を背景にしていると筆者は考える。近体の三体、すなわち七絶・五律・七律の創作は、それぞれに難しさを含んではいるが、入門期の階梯が、七絶→五律→七律と進むように、技巧的な難易度もこの階梯に従ってより高くなると見なされていた。つまりは、七律を造作なく巧みに詠じられるようになることが最上の価値であったと推測される。こういう詩学認識の中で詩人として成長し名声を獲したのが枕山である。その彼が己の技量をもっともよく示す詩型として七律を選んだのは、ある意味、理の当然というべき選択だった、と考えるべきであろう。

注（1）　張煥玲、趙望秦著『古代詠史集叙録稿』（陝西出版伝媒集団　三秦出版社、二〇一三年九月、一八～二〇頁）。

（2）　山岸徳平「頼山陽の日本楽府」（山岸徳平著作集1『日本漢文学研究』有精堂、一九七二年、四二八頁）。

（3）　揖斐高「詠史の展開―『野史詠』から『日本楽府』へ」（『江戸詩歌論』

第二部第二章、汲古書院、二〇〇一年、一二六頁）。

（4）①前掲山岸徳平「頼山陽の日本楽府」②鈴木健一「詠史詩覚書」（『江戸古典学の論』汲古書院、二〇一一年）③高芝麻子「幕末明治期における詠史百首流行と『歴代詠史百律』」（『研究』論考篇、第一章）にすでに一部掲げており、本稿は『江戸明治漢詩文書目』（二松学舎大学21世紀ＣＯＥプログラム、二〇〇六年三月）を参照しながら、それらの先行研究を整理し、それにいくつか補足した。

（5）三閭大夫（屈原）、蔡文姫、劉伯倫（劉伶）、嵇叔夜（嵇康）、張志和、林逋、蘇文忠公（蘇軾）、李東陽の八人。

（6）司馬相如、楊雄、陶潛、李白、王維、韓愈、蘇軾、方孝孺の八人。

（7）池田四郎次郎編『日本詩話叢書』巻三（文会堂書店、一九二一年、四三四～四三五頁）。

（8）内田賢治編『大沼枕山逸事集成』（大平書屋、二〇一四年、九八頁）による。

（9）「天保新楽府」は『明治名家詩選』（清樾書屋、一八八〇年）下から、「地震行」は『南梁年録』巻十五（国立国会図書館蔵）から輯佚している。